

## 【本号の掲載記事】

1. **第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会 総会長 挨拶**  
東京大学医学部附属病院輸血部長(前)・日本赤十字社(現)  
総会長 岡崎 仁
2. **第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会 企画内容紹介**  
東京大学医学部附属病院 輸血部  
副総会長 名倉 豊
3. **小児専門病院における臨床輸血看護師としての役割と課題**  
兵庫県立こども病院  
池田 圭佑
4. **～全国各地の合同輸血療法委員会～**  
**離島圏輸血医療の課題解決へ向けて：長崎県合同輸血療法委員会の取り組み**  
長崎県合同輸血療法委員会（代表世話人）  
長井 一浩（NHO 長崎医療センター 臨床検査科）
5. **編集後記**
6. **一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会**

# 第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会 総会長 挨拶

東京大学医学部附属病院輸血部長(前)・日本赤十字社(現)

総会長 岡崎 仁

このたび第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会を2026年5月14日(木)～16日(土)の3日間の日程で、パシフィコ横浜ノースにて開催いたします。東京大学輸血部が主催となる学会は1982年(第30回、東京大学輸血部遠山博会長)、2002年(第50回、東京大学輸血部柴田洋一会長)に続き3回目の開催となります。



また、横浜での開催は2013年(第61回、神奈川県赤十字血液センター稲葉頌一会長)以来2回目となります。

今回の学術総会のテーマは「安全な輸血・細胞療法とその先へ」とさせていただきました。安全な治療を患者のもとに届けるために、Patient Blood Managementの言葉に代表されるような患者中心の輸血医療もしくは細胞療法について、皆さんと一緒に考えていくことを目標といたしました。

2028年には今回と同じ場所での国際輸血学会総会 ISBT Yokohama の開催が決定しております。輸血感染症の制御など日本はトップランナーとして世界をリードしてきたはずですが、輸血の使用方法のエビデンスはほぼ海外の論文に頼っていたり、先進的な細胞療法に関しては生産を海外に頼っていたり、必ずしも日本の輸血細胞療法が最先端とは言えない状況になっています。1960年の総会、1996年の総会、2009年のアジア部会に続く4回目となる日本での国際輸血学会の開催を控え、あらためて輸血細胞療法を今一度初心に帰って学びなおす機会になればよいかと思っております。

今回の総会の企画は副総会長のお二人である東京慈恵会医科大学附属病院 輸血・細胞治療部の佐藤智彦先生と東京大学医学部附属病院輸血部の名倉豊先生、さらに慶應義塾大学医学部 輸血・細胞療法センターの山崎理絵先生、千葉大学医学部附属病院看護部の猪越ひろむ先生にお手伝いいただき、さらに日本赤十字社の宮田茂樹先生、平力造先生、各種委員会の先生方やプログラム委員会の先生方のご協力により、興味深いプログラムを組むことができました。改めて感謝申し上げます。特別講演として、東大医科研の山崎聡先生、東大泌尿器科の久米春喜先生にご講演いただき、海外演者としては次期 ISBT 会長の Lin Fung 先生、オランダから Alexander Vlarr 先生、アメリカから Philip Spinella 先生、オーストラリアから Axel Hofmann 先生等にご講演を依頼しています。

横浜は東京周辺の観光地としては見るべき食べるべきものがいっぱいあります。少し時間があれば鎌倉などの古都にも足を延ばせますし、横浜の港が見渡せる公園なども有名で数々の洋館などの歴史的建造物も多く、見どころ豊富です。日本屈指の中華街をはじめとして馬車道などのグルメスポットなども見逃せません。詳しくは横浜の観光情報 <https://www.welcome.city.yokohama.jp/> を見ていただいたり、インスタでチェックしていただいたりしてください。学会場にも少し顔を出していただきつつ、春の横浜のひと時を仲間と一緒に観光もグルメも一緒に楽しんでいただければと思います。

## 第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会 企画内容紹介

東京大学医学部附属病院 輸血部

副総会長 名倉 豊

第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会が、岡崎 仁総会長のもと、神奈川県横浜市・パシフィコ横浜ノースにて開催されます。会期は2026年5月14日から16日になります。本学術総会では、学会テーマ「安全な輸血・細胞療法とその先へ」として、輸血・細胞治療の質と安全性を次世代へつなぐための実践的かつ先進的な企画を多数準備しております。本稿では、特に臨床検査技師の皆様に関心を持っていただきたい企画についてご紹介いたします。

毎年好評の「輸血検査症例検討会」を、今回も開催いたします。内容は「治療薬と輸血の考え方」「緊急輸血時の判断」「冷式自己抗体保有患者への対応」といった、実際の現場で判断に迷いやすい症例として提示します。輸血検査の進め方、輸血用血液製剤の選択、医師への情報提供や対応方法について、参加者の皆様と共に考えていきます。日常業務に直結する実践的な学びが得られる企画です。

「若手の登竜門」では、若手技師が認定輸血検査技師等の資格取得への取り組みや将来の目標について発表します。新人技師にとっては日々の業務と資格取得、キャリア形成の具体的な道筋を描く機会となり、指導的立場の技師にとっては若手の思いや成長を支えるためのヒントが得られる企画です。

「次世代リーダー技師によるオープンディスカッションーこれからの輸血・細胞療法を見据えた人材育成・業務改善・体制整備ー」は、全国大学病院輸血部会議技師研究会合同企画として次世代を担う技師がグループに分かれ、それぞれ選択したテーマに沿って考えをまとめ、その内容をもとに次世代を担う技師によるグループ間のディベート、さらに会場全体を巻き込んだ議論を通じて、これからの輸血・細胞治療の方向性の共有、次世代リーダーを担う方々の考える場となると期待しています。

「コンピュータクロスマッチについて考える」では、業務効率化と安全性確保の両立を目的として注目されているコンピュータクロスマッチについて、導入条件や安全性確保の考え方を整理します。特に、4か月未満の児、造血幹細胞移植後患者や緊急輸血後患者のような特殊症例へのコンピュータクロスマッチ実施について実践的な内容を取り上げます。既に導入している施設、今後導入を検討している施設、いずれも具体的な運用をイメージしやすい企画です。

「緊急輸血（大量輸血）における検査技師の関わり方」では、医師・臨床検査技師の立場から、緊急輸血に対する事前準備や体制づくりなどを様々な医療機関の規模や場所に応じ、具体例とともに共有します。

「他職種からみた臨床検査技師のタスクシフト—どこまでの業務を行える（行う）のかわからない、相互理解の重要性—」では、臨床検査技師のタスクシフト／シェアが進む中、他職種からは業務範囲が分かりにくいという声も聞かれます。他職種・各職位の視点からその認識の違いを整理し、相互理解に基づく今後の連携のあり方を議論します。

## 小児専門病院における臨床輸血看護師としての役割と課題

### 兵庫県立子ども病院

池田 圭佑

当院は、周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて親と地域社会と一体となり、こどもたちの健やかな成長を目指すことを基本理念に掲げています。地域における小児高度医療の“最後の砦”として、重症例や希少疾患を含む多様な患児を受け入れ、こどもとご家族を支える医療を提供しています。その中で輸血療法は、外科手術、血液疾患、先天性心疾患、新生児医療、集中治療など多くの診療場面で必要とされる重要な治療の一つです。



小児領域における輸血看護は、成人医療とは異なる特性を有しています。身体的特徴として、体重は数百グラムの超低出生体重児から数十 kilogramsの学童期・思春期の児まで幅広く、循環血液量や投与量の管理には極めて慎重な対応が求められます。体重あたりで算出された輸血量であっても、わずかな誤差が全身状態に大きな影響を及ぼす可能性があります。そのため、確実な確認手順の徹底と、輸血中および輸血後の継続的な観察が不可欠です。

さらに、発達の特徴も重要です。言語的発達は、話すことができない段階から自らの思いを言葉で伝えられる段階までさまざまであり、認知発達や情緒行動の表現も年齢や発達段階によって異なります。啼泣で不安を示す児もいれば、言葉で不安を訴える児もいます。そのため、治療導入時の説明から輸血中の関わり、副作用の早期発見に至るまで、児の成長発達段階に応じた個別的な看護が求められます。また、保護者への丁寧な説明と心理的支援も、安心して治療を受けていただくために欠かせません。

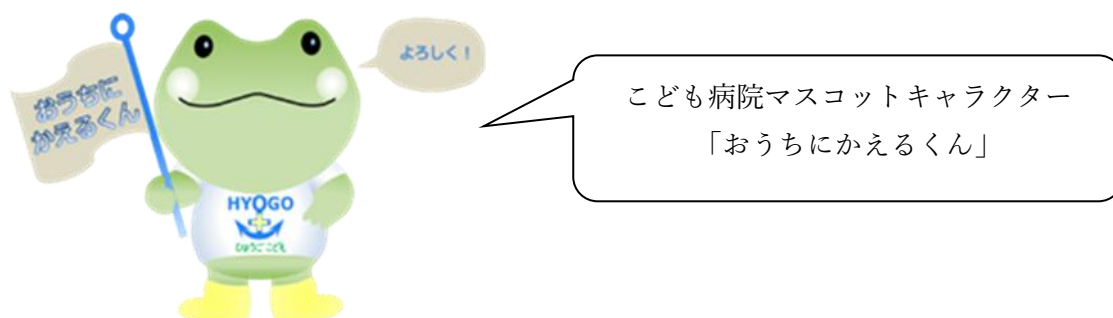
当院には現在2名の臨床輸血看護師が在籍しています。私は院内で開催された輸血研修会をきっかけに臨床輸血看護師の存在を知り、安全な輸血看護の実践につなげたいと考え資格を取得しました。資格取得当初は手術室に所属し、自部署での輸血教育の実施やマニュアルの見直し、輸血療法委員会への参加などを通して、安全な輸血医療の推進に取り組んできました。現在は病棟へ異動し活動の場は変化しましたが、これまで得た経験は、各部署での安全な輸血に対する視点を広げる大きな力となっています。

院内の輸血関連インシデントの集計・分析の結果、新生児科における交換輸血、集中治療科における血漿交換、シリンジを使用した少量投与など、診療科や部署ごとに特有の治療方法や業務特性があることが明らかになりました。部署ごとに必要とされる知識や技術が異なることから、経験の偏りが生じやすい現状も見えてきました。すべての部署を経験することは困難ですが、臨床輸血看護師として院内でどのような輸血療法が行われているのかを把握し、その特殊性を理解することは重要です。

輸血医療は日々進歩しており、安全性と質の向上がより一層求められています。インシデント分析の結果を共有し、教育体制を整備しながら組織全体で取り組むことが、小児専門病院における安全な輸血看護の実践につながると考えます。

診療報酬や病院機能評価において臨床輸血看護師の制度上の位置づけは明確ではなく、院内での認知度は必ずしも高くありません。しかし、実践を通じて専門資格の価値を示してきたことは、院内での認知向上に向けた第一歩になると感じています。今後は横断的な活動をさらに強化し、輸血療法委員会への継続的な参画や教育活動の充実を通して、臨床輸血看護師としての役割を一層発揮していきたいと考えています。

子どもたちとご家族が安心して治療を受けられる環境を守るために、臨床輸血看護師として専門性を院内に還元し、多職種と連携しながら安全文化の醸成に貢献していきたいと考えています。そして今後も専門性を高め、継続的な活動を展開していきたいと思っております。



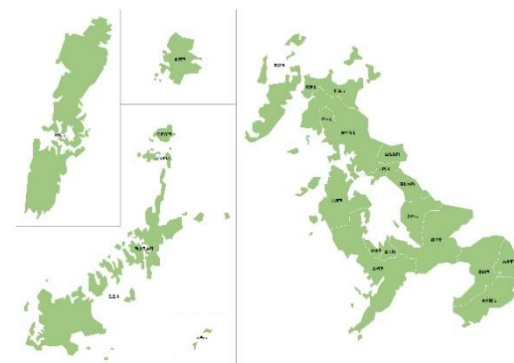
# ～全国各地の合同輸血療法委員会～

## 離島圏輸血医療の課題解決へ向けて

### ：長崎県合同輸血療法委員会の取り組み

長崎県合同輸血療法委員会（代表世話人）

長井 一浩（NHO 長崎医療センター 臨床検査科）



#### 1. はじめに

長崎県は全国最多となる 1,479 の島々を抱え、そのうち 51 の有人離島には地域特有の自然、文化の中で約 11 万人もの人々が暮らしています。しかし、この地理的条件は、輸血医療においては極めて厳しい「物流の壁」となります。交通手段が限られ、気象条件に左右される離島では、しばしば血液製剤の供給遅延や途絶のリスクが付きまといまいます。長崎県合同輸血療法委員会では、この離島医療の抱える物理的な距離の問題を克服し、円滑で安全な輸血を受けられる体制維持を支援するための活動を続けています。

#### 2. 離島輸血のジレンマ：在庫確保と廃棄率の闘い

離島の医療現場が直面するのは、「在庫を抱えれば廃棄が増え、絞れば生命の危機も」という深刻なジレンマです。製剤の発注から納品までのリードタイムが長く、運輸業界の情勢にも依存する現状では、最悪の事態を想定した「過剰在庫」を抱えざるを得ません。実際、在庫保有医療機関における赤血球製剤の高い廃棄率が続いています。

#### 3. Blood Rotation とドローン搬送の可能性

長崎県では、令和 3 年度に、可搬型血液製剤保冷库（ATR：Active Transport Refrigerator）を用いた長崎県五島中央病院と長崎県血液センター（BC）、長崎大学病院の間の「循環型血液製剤運用モデル」いわゆる Blood Rotation（BR）の試験運用を試みしました。ATR は厳格な温度管理を 24 時間体制で記録・維持できる装置であり、格納中の品質管理とトレーサビリティを担保します。一定期間離島で使用されなかった赤血球製剤を本土の BC 経由で長崎大学病院へ返品再出庫する柔軟なネットワークの構築が、離島医療における輸血医療の効率性向上に寄与し得ることを明らかにしました<sup>1)</sup>。



令和5年度からは、無人航空機(UAV/ドローン)を用いた飛行搬送による製剤供給の迅速化研究を、血液製剤使用適正化調査研究事業や本学会の臨床研究推進事業の御支援のもと重ねています。外気温や振動・衝撃の影響を緩和し得る搬送ボックスの開発、保冷剤・蓄熱材の組み合わせによる厳格な温度管理等により、品質を維持した

ままリードタイムを劇的に短縮する社会実装を目指しています。既に、赤血球製剤及び血小板製剤を適切な温度管理を維持しつつ約100kmの長距離を1時間で到達可能であることを明らかにしています。また、この搬送により赤血球製剤では溶血所見を認めず、血小板製剤ではスワーリングやCD62P発現等の観察では明らかな品質の変化を認めませんでした。今後、より具体的な搬送ネットワークの構築を進めてゆくことになります。

#### 4. さらなる連携強化へ：継続的な議論の場を構築

離島の輸血医療の課題に取り組むうえで、その現場で日々業務に携わる関係スタッフとの継続的な意見交換は不可欠な要素です。そこで令和7年には、長崎県合同輸血療法委員会の傘下に「離島圏医療機関関係者会」を立ち上げました。各島々の医療者が手を取り合って継続的な意見交換を実施、合同輸血療法委員会を通じ課題解決の対策をアップデートして、BCや行政サイドに様々な提案を進める場にしてゆきます。既に、全国レベルの調査事業への協力や各種指針の共有を進めているところです。

#### 5. 結び：

離島における輸血医療の課題は、単なる配送の問題ではなく、日本の地域医療が抱える構造的な格差の象徴でもあります。これを乗り越えるためには、BRやUAVといった新たなシステムの導入と、それらを束ねる組織的な連携が不可欠です。物理的な距離は変えられなくても、命を救うための「仕組み」は変えられる。貴重な献血血液を一滴も無駄にせず、離島の暮らしを守る最前線を、長崎から全国へ向けて力強く展開していきます。

#### 参考文献

1) Nagai K. et al. Feasibility evaluation of a blood rotation system for efficient blood product utilization in remote island settings. Vox Sang 119(6); 548-55. 2024. [doi.org/10.1111/vox.13626](https://doi.org/10.1111/vox.13626)



## 編集後記

春風の心地よい季節となり、新たな年度の幕開けを迎えました。

皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

e-News31号は、来る2026年5月14日(木)～5月16日(土)に開催されます第74回日本輸血・細胞治療学会学術総会の特集号として岡崎 仁総会長、名倉 豊副総会長より本総会のアピールポイントをご紹介していただきました。今年のテーマは「安全な輸血・細胞療法とその先へ」です。文明開化の中心地のひとつとして発展してきた港町ヨコハマの地にて、皆さま方々が目指す、「安全第一の輸血・細胞療法」を思い描きながら、そしてより確実な安全文化の醸成が根付いていく足音を肌で感じながら、学び豊かな会期となりますよう祈念いたしております。

まさに今、AI(人工知能)時代の到来です。

学術総会の場合「知識を集める時代」から「知識を使いこなす時代」へとシフトしていこうとしています。

(鳥海 綾子)

## 一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

### 委員長

生田 克哉 (北海道赤十字血液センター)

### 副委員長

池本 純子 (兵庫医科大学病院)

### 委員(50音順)

石井 洋子 (船橋市立医療センター)

北崎 英晃 (日本赤十字社北海道ブロック血液センター)

小見山 貴代美

鳥海 綾子 (慶應義塾大学病院)

長村 登紀子 (東京大学医科学研究所附属病院)

奈良 美保 (秋田大学医学部附属病院)

野崎 昭人 (横浜市立大学附属市民総合医療センター)

東山 しのぶ (奈良県総合医療センター)

日高 陽子 (東邦大学医療センター大森病院)

藤井 紀恵 (藤田医科大学病院)

藤田 浩 (墨東病院)

牧野 志保 (岡山県赤十字血液センター)

松本 真弓 (神鋼記念病院)

森山 昌彦 (東京都立多摩南部地域病院)

山崎 喜子 (茅ヶ崎市立病院)

山田 麻里江 (佐賀大学医学部附属病院)

吉田 雅弥 (熊本赤十字病院)

米村 雄士 (熊本県赤十字血液センター)

### 担当理事

池田 和彦 (福島県立医科大学)